近世中頃の中国地方山間部における尊敬語辞類
――『石見方言茶話』の模様と日本語史における位置――

彦　坂　佳　宣

1. 本稿の目的

近世中頃に中国地方石見で成立した『石見方言茶話』の尊敬語辞類を整理し、当時の模様を考察する。その際、同時期の中央語である近世上方語と比較し、その特徴を考えたい。また今日の『方言文法全国地図』（以下、GAJ と略称）の尊敬語事象との比較にも触れる。

この資料は米田隆史（2004）によって紹介され、近世中期の石見国山間部の方言を基調とするものと考えられ、地方的な言語資料として貴重である。近世期の方言資料は庄内（斉藤義七郎 1965）、名古屋（芥子川律治 1971）、九州（吉町義雄 1976）その他が知られるが、この資料も田植歌（山内洋一郎 1989）とともに中国地方の模様を語るものと思われる。本稿の直接の目的はここに現れる尊敬語辞類の整理であるが、遠くは全国的な尊敬語辞の史的研究のためのデータになるものと考え、その基礎的な作業の一環として考察する。

この資料の成立経緯などは、彦坂（2012）で格助詞ノとガの考察をした際に述べたが、米田氏の教示も交えて、簡単に触れておく。ノートルダム清心女子大学「佐藤茂文庫」蔵、「安永乙未 -4 年（1775）」とある序文によれば、作者「仰誓」が石見の浄泉寺（現･島根県邑智郡邑南町市木）に 44 歳から「寺務タル事十年」の時、仏道帰依を勧める説教を「国辺ノ士女ノキヽヤスカラシメン」ものとして作成した。その遅からぬ時期の転写本である。仰誓は上方出身ながら、石州・芸州での法談活動を通じて―市木は当時その中心的な地域の一つであったという―、多くの地域方言話者と接し、この著作を思い立ったようである。作成の地域と時期が明確で、近世中頃の中国地方山間部の方言資料とみなせるものと思う。

ただし、作者の言語歴や説教的な目的と口調からして、資料自体の整理がすなわちこの地域の当時の言語模様を語ると考えるのは危険である。直接に比較する資料は今のところ見当たらず、そこで当時の中央語として威光をもった近世上方語、また今日的な模様を語る GAJ とも比較し、間接的に当時の実態を推測するかたちをとり、あわせてその位置づけを試みようとする。こうした文献資料の定位は、どこまでも相対比較の域を出ないが、今の段階ではこうした資料との比較が有効と思われる。

以下、国語史の名称は中央語史の意味とし、近世中期以前は近畿地方、それ以後は江戸もふくめた地域方言とし、各地方言を含めたものは「日本語史」の表現とする。

2. 『石見方言茶話」の尊敬語整理

この資料は、「主」（檀那寺の和尚）が「客」（老齢の一檀家）に信心を説くもの、他に「坊守」（和尚

の妻)・「姥」(恐らく和尚の母)・「婢」(女召使)などが登場する。本文は、これら登場人物の略称が朱書きされ、続いてセリフが漢字カタカナ混じり形式であり、これはやや標準語的、さらに随所に傍訓が自立語また助詞との融合面などにカタカナで施されている。傍訓はきわめて生き生きした口調で、多くは当時の方言音を再現する意図があろう。

以下、ここに現れる尊敬語辞類を形式ごとに列挙していくが、まず①動詞用法、続いて②補助動詞の用法を述べる。なお、「聴聞めされる」など、問題の形式が直接、漢語複合動詞的になる場合は、仮に本動詞扱いとする。上記①が②の用法もある場合は、一緒に記述する。また、用例数も添えるが、ゴザラッシャルなど複合形式のそれぞれがゴザル・(サ)シャルと明確な場合は各語を数え、ゴッサル(多く「下さる」表記)など「呉す」に後接するものがナサルか(サ)シャルか迷うものは数えないでおく。また、語形表示は、「　」内のひらがなは見出し形、説明文中のカタカナは具体形(推測も交え)とする。「ナサレて」などのひらがな部分も見出し的な形式である。用例として示した文例のカタカナはなるべく本文に近いものとした。厳密ではないが、資料で小書きのカタカナ(促音的なツや拗音性のもの)は半角とした。

2.1　動詞用法のもの

2.1.1　いわゆるラ行下二段敬語辞の類

近世前期の国語史では、いわゆるラ行下二段敬語辞が問題となる。「召す」「下す」「なす」「遣はす」などに助動詞(ラ)ルルが後接する類である。坂梨(1975)によれば、この類は下二段活用であったが元禄以降よく四段活用化した。その要因は末尾「(ら)るる」と熟合して一語化したこと、活用形では命令形の～レヨの～レ化が先行したこと、四段化の順は「召さる(る)」を先に上の順であり、「召さる(る)」はその後「する」の意味となり、「なさる(る)」と競合して早く衰退したとする。

近世前期のこうした変化は、当該資料でどう現れようか。まずこの点を見る。以下、活用型を問題とするが、各語の見出しはその後の四段化形「召さる」「なさる」などで示す。掲載はほぼ使用度の高い順、学校文法の活用形ごと(揃わない場合多し)、この中での動詞用法・補助動詞用法の順とする。

(1)「召さる」動詞用11例、補助動詞6例

動詞用法では「する・食う・飲む・する」意の例、補助動詞は「する」に使用される。前者が多い。

○不断聴聞モメサレウガ…　8ウ　主→客

○マタ残リ衆ノ調計ヲメサレマシヨ　2ウ　主→客

○如来様ヘウチマカセテ往生治定ト安堵メサレチヤウズ。　主→客　12オ

○寺参リバツカリメサツタテヽ信心モ不決定而ニ参タ分ニヤ…　主→客　8ウ

○仏壇ニモ蛛ノ巣ノハラヌヤウ御掃除モメサレヨ。　主→客　12オ

当該資料の場合、「召さる」は、後述の「なさる」よりも多用され、人物関係は、多く「客→主」、稀に逆の関係も現れ、高い待遇価値をもつ。

活用は、例示の第4例、連用形の一つに「メサツタてて」、また例示しないが「メサツちようず」と四段的な例が2例があるが、他は未然形「メサレう」(これはメサリョーであろう、四段型ならメサローが予想される)「メサレず」計2、連用形「メサレて・た」などが4、命令形は二段的な「覚悟メサレーヨ」と「メサレー」(これはナサレヨのヨがイ化した経緯があるとし、四段型ナサレの末尾長音化とは見ない。ただし、四段型メサレの長音化とも見られるが、積極的な四段化例ともしがたく採らない。以下同

じ）が数例で四段的なメサレはない。終止連体形がなくて明確でないが、四段化はまだ強くない。

なお、第3例「安堵メサレチヤウズ」は、固定的な表現として「～メレチャウズ」2、「メサッチョーズ」1が見られる。これは、「召され＋ておる＋うず」由来と思われ、当時この地域の進行形は～チョル、そして古典の推量・意志の助動詞ウズの痕跡を残す点で参考になる。ちなみに、進行アスペクトは今日のGAJ 198図「散っている」で、安芸側はチリオル、石見側はチッチョルが現れて、当資料の例は石見側と合致する。ウズは、中世末のロドリゲス『日本大文典』（土井忠生訳）では京都のウズ（ル）、「三河から東」のンズの記載があるが、近畿より西の記載はない。近世初期には上方語でも痕跡程度となった（湯沢1936）。今日のGAJでは四国・九州に痕跡はあるが、中国地方にはまず無い。一方この資料に見える例は、改まりの度の高い慣用のような例であり、位相も問題になるが、地方的なウズ残存例として貴重であろう。

他に「ヨウコソ（サアレ）世話アメサイシタ　2ウ」がある。これは「召さる（る）＋ました」由来か、（さ）しやるとの熟合がイ音便化したものであろう。今は活用例の判別には入れないでおく。

(2)「なさる」動詞4例、補助動詞13例（「お（ご）ーなさるる」は補助動詞とした）。

○サゾコンター、難儀ウミツサローー。　坊守→客　14ウ

○馬ニデモ御乗ナサレマセイデ。　客→主　1ウ

○少ハ身ノ（チツタアミガラ）御用心モナサレマセー　客→主　2オ

○日ガ短フテ・・・休息（ヤスフ）デオマハリナサルゝ暇（ナカア）モアルマイ　客→主　1ウ

○コリヤア猫（チヨコ）ガ御好（ヲスキン）ダソウナ。男成敷（ヨイコヲ）ナサレーヨ。　客→新発意　3オ

○皆々（ミナフミナ）ウツタゝアテ死ヌル事ハ見ッサレ、今（インマ）ノ間（マン）ダホドニ・・・　主→客　12ウ

主たる人間関係は「主」「客」の相互間に使われ、高い待遇価値をもつ。

活用について、動詞・補助動詞をまとめて見ると、未然形「～ミッサロー」は「見ナサラう」と考えて四段的、最多は連用形で「～ナサレ＋て・ます・たら」とナサレ形のみで、四段型はない。終止連体形は「ナサルル暇」1があり二段型、命令形は二段的な「～ナサレー」と四段的な「～ナサレ」の両用である。全体に連用形などを中心に下二段的形式を保持し、丁重な表現では終止連体形にも二段型が現れる。わずかに四段型もあるが、常用の段階には遠いように思う。

○コノ飯（メシ）ハヨフニ米（コメ）ヲ炊（ウ）テタ（トイ）アタケニ・・・ヲツタチラトシイサイセ　坊守→客　14ウ

は「なさる（る）＋ます」構成の縮約された命令形であろう。熟合形であり、元の活用型については判別しがたい。

(3)「下さる」　動詞3例、補助動詞6例

○コノ、オツシヤツテ下サレマス事　客→坊守　14オ

○檀那様へ…御礼ヲオツシヤツテ下サリマセ　客→坊守　15ウ

○ドゲナモノヲ参ラセテ下サル、アリガタイ事ンダトシヤー　主→客　12オ　仏への敬意

○御助ケナサレテ下サルゝ御本願ゾトウタガハズ・・・　主→客　11ウ　仏への敬意

○白湯ヲ下サレー　客→姥　15オ

活用は、下二段と四段が、連用形2対3、終止連体形は1対3、命令形は1対1で、終止連体形に二段型はあるものの、今までの中で最も四段化例が優勢である。ただし、活用型が揺れているのが現状であろう。待遇価値も人物関係からして高い。

(参考)「ごっさる」　動詞1　補助動詞8

関連して注意すべきものに、「下さる」の傍訓に「ゴツサル」の例が多いことがある。

○極楽ヘマイラセテ下サル(ゴツ)ニ、ソツトモ覚束無事ハナア　　主→客　6ウ　如来への敬意

○我々ヲ人間ニ生レサセテ下サレ(ゴツ)タハ優曇華ノ花ゾヨ　　主→客　4ウ　　同

ゴッサルの主体は「呉(こ)す」で、中国地方山間部に多いようである。例えば、藤原与一『日本語方言辞典』鳥取県因幡南部239頁、平山輝男『日本のことばシリーズ32　島根県の方言』89頁、また『日本方言大辞典』「よこす」項の中のゴス・ゴッシャル関連語形でも中国地方の例が多い。

ゴッサルの後項はナサルによる熟合形と思うが、(サ) シャル（これも本来はラ行下二段敬語辞）も捨てきれず、今は活用型の判定には入れない。ただし、どちらが後接したとしても、連用形2例はゴッサレ～と下二段的であるが、命令形はゴッサレで四段的、残る終止連体形5例は「ゴッサル仏」など四段型であり、全体には四段型が優勢である。後述する「(さ) しゃる」が四段型の強い点では、これが後接した熟合形の可能性が高い。

ゴッサルが使用される人物関係は、「主→客」の間で「如来・仏」を尊敬する表現に集中する。一方、クダサルは主として「主」「客」「坊守」間での使用である。この点、区別があり、ゴッサルは古いが敬意は低くなく、クダサルが現代的なものとの認識が窺える。

(4)「遣はさる」　動詞用法3例

動詞用法だけであり、類似の「下さる」が補助動詞も多いことと対照的である。

○コレハ御馳走(リヤアオチガホン)デゴザリマス。然(スンナラ)一ツツカハサレマショー。客→坊守　3ウ

○一椀ツカハサレマスレバ能機嫌で・・・　客→坊守　3ウ

全3例あるが、全て「ツカハサレ＋ます」(3ウ、3ウ、13ウ）の例で、下二段的である。「客→主・坊守」間で「飲食を下さる」意味の高い待遇である。「下さる」と比べやや古めかしいものと思う。これは二段活用「ますれば」との共起例があることとも符合する。

なお、「遣はす」は近世前期上方語で既に「武士の普通用語である」(山崎久之1963、381頁）と位相的なもので古態、一方、GAJ 302図「来なさい」の末尾形式にツカワスが中国山地に2地点、藤原与一（1979)、同（1988)、また『日本語方言辞典』(小学館）の「つかわさる」「つかわされ」項でも、同じく中・四国地方の分布が強く、近世の時期にも地域性の強い敬語になっていたのではないか。先のゴッサルとともにこの資料の地方性を語るものであろう。

(5)「(さ) しゃる」　動詞用法0、補助動詞17例

この語は既に補助動詞だけで、後に回すべきであるが、元来はラ行下二段敬語辞の仲間なので、便宜ここでとりあげる。

用例も多く、活用形もよく揃っているが、命令形が多い。

○傘(カソウ)ヲサアテオカイレ・・・。ソレンジヤー濡(クサレ)サロ　姥→客　16オ

○コノ間ハ・・・ナントカ思召(オモハサレマシテ)テ御訊ヲナサレテ下サレマシテ忝フゴザリマス　客→主　1オ

○破傘(ヨフナシガサン)ダケイ、ハネコカイテオカサツテモ大事ナイ　姥→客　16オ

○スンナラまた、ナゴライタラ参ラサレー　坊守→客　15ウ

○上(カミ)ノ間(デ)ニ御座ラシヤル如来様ヘ朝夕(アサナユウナ)ニ御礼ニ・・・掃除モメサレヨ　主→客　12オ　如来への敬意

○ソガア思ハサルモ道理ダガ、ナンジヤリ兄弟ノ子ニワケヘダテハゴザラネド・・・　主→客

会話中の引用、兄弟を亡くした母→人々　10ウ

○ソレヲ御縁ニシテモ、ナヲ事御恩ヲ喜バサレー　坊守→客　14ウ

例のように、形式は「シヤル」もあるが、「思ハサルモ道理」など直音サが多く、「なごらイたら」などのイ音便もあり、多彩である。使用度が高く活用形の種類も多く、連用形は二段的な「説かサレ

た」もあるが、「ならサリました」「置かサッても」など、問題とする敬語辞類の中で最も四段活用型が強い。ただ、命令形は～レー形がほとんどである。これに限っては、この四段型優勢の点で、この地域の一段型のそれが、「～よ」より「～い」が多く、それに類推したためであろう。

用法の上では、対者へもあるが第三者への敬意が多く（GAJ により、近世を想定）、旧来からの手ずれした敬語辞であることが示唆されている。これと相俟って「主→客・坊守」「姥→客」と、人間関係からして敬意の幅は広い。

なお、シャ→サの直音化は、藤原与一（1978）305 頁に、今日も（サ）シャルの盛んな出雲・隠岐に類似の現象があり、当該資料の時代にもこれがあったのであろう。

以上、まずラ行下二段敬語辞の語類を取り上げた。ここで、この類の四段化の傾向を見ておく。四段化の筆頭は、「（さ）しゃる」である。国語史での「（さ）しゃる」の成立は他の語類より早く、四段化および補助動詞化も先行したのであろう。当該資料でも同じである。また、「ごっさる」は複合形式の出自が疑問であったが、四段型が強い点では（サ）シャルとの熟合可能性がある。他の語類については語例が少なくて難しいが、ひとまず「下さる」が先行し、「召さる」「なさる」と続く。

さて、このように近世中頃まで二段型が勝るのは、当該資料が説教的表現のためとも疑われるが、今は判断する材料に乏しい。勘ぐれば稀に見える終止連体形の四段型があるのは、一方の口語面で既にこれに傾いていたことも想定されよう。しかし、概してまだ「（さ）しゃる」を除き、四段型が常用されるような段階ではないように思う。なお、資料性に問題は多いが、参考までに『田植歌』（新古典大系による）には、僅かに上の類のうち「召さる」の動詞用法連用形 2 例があり、やはりともに「メサレ～」の下二段的なものである。しかし、この資料の成立時期とも絡んで判断は難しい。

上方語との比較の上では、まだ四段型は優勢でないこと、語類の中では、まだ「召さる」が多用され動詞用法も多いことが問題となろう（後述）。

2.1.2　ラ行下二段敬語辞以外のもの

次にはラ行下二段敬語辞以外のものを見る。

(6)「オ＋一段式」 動詞用法 4 例 （「お帰る」1 も動詞用法とする）

これには終止連体形オカイルがあるが、他は「オ＋連用形」の命令表現で、用例が少なく、完全な「オ＋一段化」形式の普及度は分からない。両者をまとめてよいか迷うが、今は同類にまとめる。

○オカイル（お帰る）カ、闇夜（クラア）ケニ松明（タイ）ナツト提灯ナツト持テヲカイレ。　姥→客　15 ウ

○コレ降ルナラ傘ヲサアテオカイレ。　姥→客　16 オ

人物関係は「姥→客」ばかりで、ナサル・（サ）シャルより待遇がやや低く親愛的な表現のように思われる。あるいは女性の使用が多いものかも知れない。

(7)「おつしやる」 動詞用法 3 例

これは特に言うこともないが、すべて「客→坊守」のクダサル・クダサレマス類を後接させた形式で、極めて丁寧な表現である。

○檀那様へ能（ヨフ）御礼ヲ被仰（オツシヤツ）テ下サリマセ　客→坊守　15 ウ

これもラ行下二段出自との説もあるが、「オ－アル」と見て、いま活用型は問題としない。

(8)「ござる」 動詞 2 例、補助動詞 2 例

「ある・いる・来る」の意味で使用される。

○アヽ、スンナラ孫燕ガ待ゴザロ。　坊守→客　15オ

○上ノ間ニ御座ラシヤル如来様ヘ朝夕ニ御礼ニ懈怠ノナイヤウ・・・召サレヨ　主→客　12オ

○来昌寺の坊守サマモ、ソガア云テワライゴザツタテー　客→坊守　14ウ

○アヽミトモナフ、コツチヘゴツサイセ。　坊守→客　14オ

第2例はシャルと結合した形で敬意の対象は第三者の如来、最後の例はゴザルと、ナサルないしシャル、またマスとの融合形であろう。全体に命令形を除き、第三者への敬意であり、複合形をとるのと相俟って当該資料でもやや古態の形式であろう。待遇価値も高くない。

(9)「おじやる」　動詞用法3例　補助動詞0

動詞用法はジャル形として現れる。なお補助動詞「～ではオジャラヌ」(15ウ)は丁寧語とする。

○ヲヽ桶屋ノ権衛門カ、好来タ　主→客　1オ

○他所法談 僧 も来デアラフケニ・・・　主→客　　話題とする僧への敬意

○持テジヤーレ　　姥→客　　15ウ

(10) その他

このほか、「参る」1「思し召す」1などがあるが、前者の「食べる」の用法だけ示しておく。

○マア、夜食マイリンセ　姥→客　13ウ

複合形でその後項はヤンスかヤスであろう。ヤンス・ンスは「進ジヤンシヨー」と謙譲語の後項にも出るが、ヤンス・ヤスの自立した例はない。命令的形式のみの伝播があって使用されたのかも知れない。

2.2　補助動詞・助動詞など

(11)「(さ)しゃる」類　動詞用法0、補助動詞17例

これは便宜、2.1.1項で記述した。

(12)「やる」類　17例

この例はかなり多く、未然・終止連体形も幾らかあり、しかし多くは命令形のヤーレ・～ヤである。

○寺参リシヤーラニヤ極楽へ参ラレヌト云デハオジヤラヌ。　主→客　8ウ

○ムテンナ事ヲ云ヤアルハ氷柱に彫り物をスルヤウンで・・・主→客　11オ

○トマツテ明朝イニヤーレ。　主→客13オ

○ゴツトコツチヘ寄リヤ、話ソウゾヨ。　主→客4ウ

人物関係は「主→客」が多いが、「姥→婢」もあり、ナサルよりやや低い待遇であろう。しかし、用例はかなり多く、いくらか敬意があり、頻度も高かったことと思われる。

(13)「(さ)んす」類　4例

確かなものは数例、すべて命令形～ンセで、「姥→客」「姥→小僧」の関係で、やや気安い物言いに使用されている。

○マア夜食マイリンセ。　姥→客　13ウ

(14)「(ら)れる」類　4例

全て第三者への尊敬であり、「主←→客」間の会話で話題となる「如来、(歌を詠んだ)或人、皆々」が対象である。ただし、末尾の例のように、命令形だけは「客→主」の間の例がみえるが、「(ラ)れます」とマス後接で丁寧度を増している。

〇或人ノヨマレタ歌に、・・・　主→客　12ウ

〇如其（ソガアニ）・・・御勤ナサレマシタラ皆々（ミナフミナ）サゾ喜（ツバヘ）ラレマシヨ。　客→主　「皆々」への敬意　2オ

〇過ギルト喘息マスケニ、ハアゴユルサレマセ。客→主　4オ

少例であるが、敬意の主体は第三者が多い点で、古くからあり、もはや対者には使用されにくくなったものであろう。「ます」を付けない単独形での敬意はあまり高くない。

(15)「テ指定辞」1例

〇ソツチノ御内儀モ歯ガワルイト云テンジヤノー。　主→客　客の内儀への敬意　14オ

この形式は上方語でも多く、近世中期のこの資料にもう少し出ても良さそうであるが、わずかに1例のみ、話題の人物への敬意である。さして敬意は高くない。

(16)　判断保留の形式　なお、以下に判断を保留した形式を挙げておく。推定する構成も右脇に示したが、それらは上記の各語の数には入れていない。

〇入レサイセ　姥→客　2ウ　恐らく「なさいませ」出自であろう。

〇腰廻サイセ　姥→客　14オ　後項は同上か、またはシャルの可能性はどうか。

〇見テゴッチヤレ　姥→婢　17オ　　恐らく「ござる＋シャル」であろう。

〇コツチヘゴッサイセ　坊守→客　14オ　　同上

これらは後項の出自が明確でない。それは、既に熟合し方言形となっていることが要因であろう。

2.3　待遇度、対称代名詞との呼応関係

さて、以上の敬語辞の**待遇価値の程度**はどうか。やや用例の多い補助動詞・助動詞の主要なものについて考える。

人物関係は、「客」は説教を受ける信者で、「主」とある旦那寺住職が上位、「坊守・姥」も「客」に対してはやや上位の位置にある。以下、人物関係、その右に汎用的な助動詞、その下段には特定の意味の形式を示す。そして「基本形・命令形」の順に示す（該当例の無い場合は「-」とする）。

客→主　　お-なさるる、お-なされます、　-・お-られませ
　　くださります、めされます

主→客　　なさる・なされ（ー）、　さる・され（ー*(サ)シャル類）　　ヤル・ヤレ
　　召さる・召され（ー）、じやる（「来る」など）・-

坊守→客　　さる・さいせ

姥→客　　さる・され（ー）、　なさる・ナサレ　　-・ンセ、　オ＋一段・お＋連用形（命令・勧誘）
　　召サル・-　、-・下サンセ

客→坊守
　　下さります・～ませ

客→姥　　―
　　-・クダサレー

姥→三右衛門（下働きか？）　　やれ・や　　-・召され

第三者を主に

主→客の中　仏へ　　ゴッサル・-、　　-・クダサル（ル）、　サル・-

これによれば、少なくとも、

第一に「お-なさる、お-なさります」「下され（り）ます、めされます」

第二は「なさる・なされ、さる・され、やる・やれ」「ごつさる、めさる」の二段階の区別は認められよう。このうち裸の命令形はやや価値が低くなる。なお、（ラ）レルは、単独ではそれほど待遇価が高くない。テジャも同様と思われる。実際にはさらの細かな体系段階が想定されようが、今は手掛かりがない。

次には、**代名詞との対応関係を見る**。相互に待遇価値を同じくするものの関連があり、特に対称代名詞とのそれは重要であろう。

この資料には僅かであるが次の対称代名詞が現れてくる。人物関係と例数も示す。

アナタ　客→主１　客→坊守１

アンタ　主→客５　　姥→三右衛門どの（寺の下働き）１

アンタシ（衆）　主→客２

コンタ　主→客１　坊守→客２

その述部敬語との対応は次のようである。ただし、①少例のため直前直後の文で同じ主語のものを加えたこと、また②述部に対応する尊敬語辞がない場合もあり、上の数値とは一致しない。

アンタ：　覚悟メサレー１　合点メサレズ　召サッタ　云ヤール　　寝ヤーレ　４　寄リヤ　飲ミヤーレ　　見ヤーレ

アンタシ：　聴聞メサレウガ　寺参リシヤーラヌ　オジヤラヌ（補助動詞）

コンタ：　見ッサロー　　シ（為）イサイセ

次の例の最初のものは上の①に当たるもの、末尾例は②相当のものである。

○アンタの家ニ如来様ヲ置キマスト思ハズト如来様ノ御傍にワ（私）ヲ置テ下サルト思ハヾ粗忽麁末ニハナラヌハヅ　12ウ

○ヒトリ〳〵ノ大事ト思フテトトックリト覚悟メサレーヨ。アンタもハアヨツコロ（余程）年ヲヒロフタレバ、コレカラ何ボ命ガ延デモ・・・　11ウ

○コンタノヤウニチツター後生心ロモアルノニ聴聞モセセリクサーテ、ミーヤスイ御ススメヲ合点メサレズ極楽マイリモナマナリヨツタヤウンデモ　11オ

これによれば、アンタ・アナタは「召さる」「おじゃる」「～やる」相当が対応すること、コンタは「召さる」「なさる」相当のそれが対応するとひとまず考えられる。

以上、この資料の内部的な模様を述べて来た。次には、同時代の中央語である上方語との比較を試みる。

3. 近世上方語との比較、『方言文法全国地図』との関連

いま近世の待遇体系を山崎久之（1963）の待遇形式とその段階や主述対応を五段階に分けた、766頁以下の表から、本稿に関連する事柄を摘記すれば、次のようである。

第１段階　　お前・お前様　--　（お）- なされます　（お）- 遊ばされます・遊ばします　しやり（れ）ます

第２段階　　こなた・貴様　--　（お）- なさるる　（お）- 遊ばさるる・遊ばす　しやる

第３段階　　そなた・わが身・おぬし　--　- 召さるる　やる　お - やる（武士・老人）

（以下、略）

この表にはないが、他に「テ＋指定辞」「（ら）るる」は主として他称に使用され（201 頁）、「やる」「召さる」を含め、およそ「そなた」段階程度、「召さる」は武士などの使用が中心と述べられている。

続いて、近世後期は、代名詞に新たにアナタ類が第 1・2 段階に上位に入ってくるが、述部に大きな出入りはない。ただ、矢野順（1976）によれば、後期（サ）シャルは衰退するという。

これを第 2 節の記述と比較すれば、当該資料との共通点はオ－ナサル・（サ）シャル・ヤル・（ラ）レルなどあるが、違うのは、「遊バス」や熟合形ヤンス・サンスなどが無く、一方、上方語で劣勢となりつつある「召サル」・（サ）シャルなどは盛行していた。

主述対応の面では、上方の「アナタ―遊バス、オ－ナサル、（ラ）レル」などに対し、当該資料では、アナタ類はあるが、その述部形式は上方語で既にやや待遇価値が低くなったヤル・（サ）シャルとも対応している。つまり、述部形式が一段階古い形式類になっている。国語史で近世後期に主流となるアナタ類が、この近世中期の当該資料に早くも現れ、一方で既に劣勢となったコナタがなお幾らか使用され、上方語を基準にすると代名詞は新・古が混じった様相、述部は相対的にやや古い形式類がなお多用されているのである。

この主述対応は、総じて、中央語に比し古態の様相であることは地方方言として順当なところであるが、一方でアナタが早くも見られることは注意される。当該資料のアナタについては、作者が上方出身であることが要因とも疑われるが、そうは考えにくい。彦坂（2011）でみた GAJ 336・335・333 図「あなたの傘か」の場面差のある地図の対称代名詞は、今日やはり新形式「あなた」が石見地方にも続く広島県付近に近隣地域を圧して集中し、何かの要因でこの付近への伝播が早かったことを語る。一方、尊敬語述部は、GAJ 273・271 図「書きますか」で見ると、同地域はやや遅れた形式―ンサル・テジャ、そして（ラ）レルをとる傾向がある。ただし（ラ）レルは GAJ の場面差のある 2 図での出方から見て共通語的性格が強いものと思う。

これにより、やはり代名詞と尊敬語述部には変化（伝播）に遅速があると思われる。関東から太平洋側を伝って宮城県までの地域でも、代名詞アナタ類は早く北上するが、述部尊敬語形式は遅れがちである（ただし、いわゆる無敬語地帯としての地域性もからむが）。一般化にはなお他の事例の参照も必要であるが、ひとまず代名詞の方が述部尊敬語より伝播を含めての変化が早いことが考えられよう。

4. まとめ

以上、『石見方言茶話』の尊敬語述部形式を記述し、それを、近世期の上方語、また幾らか GAJ の模様とも比較を試みた。

そこから、同時期の上方語と比べて、ラ行下二段敬語辞はなお二段活用的な性格が強く、上方語で早く衰退した「召サル」も盛行し、同じく古態的なヤル・（サ）シャル、ジャルなども待遇価値がやや高く盛んであり、「遣ワス」・ゴッサルなど方言的なものも見られた。この点、当時の模様を表している可能性が高い。威光のある上方語から離れた地域の方言として、この古態性、また方言的形式類が見られるのは当然予想されるところであるが、そこにこの資料の方言資料としての信憑性

が窺われるのではないか。

GAJ との詳しい比較は次の機会とするが、当資料の古態・方言的な面が西日本の範囲での整合的な解釈ともほぼ一致する。また、中央語からの対称代名詞と述部尊敬語の変化（伝播）に時間差のあることも考えられた。

今後は、当該資料の地域方言としての信憑性をなお確かめつつ、一方で GAJ の尊敬語辞の全国分布の言語地理学的解釈に活用してみたい。

引用・参考文献

斉藤義七郎（1965）「江戸期方言資料としての庄内郷土本」『近代語研究』1
坂梨隆三（1975）「ラ行下二段活用の四段化」『国語と国文学』52-1
彦坂佳宣（2011）「対称代名詞の分布と歴史 -『方言文法全国地図』「あなたの傘」の解釈 -」『国語学研究』50
彦坂佳宣（2012）「近世中頃の中国地方山間部における格助詞ノとガの用法」『論究日本文学』96
藤原与一（1978）『昭和日本方言の総合的研究 第一巻　方言敬語法の研究』
藤原与一（1979）『昭和日本方言の総合的研究 第二巻　方言敬語法の研究　続編』
矢野準（1976）「近世後期京坂語に関する一考察―洒落本用語の写実性―」『国語学』107
山内洋一郎（1989）「田植草紙のことば」『中世語論考』清文堂
山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院、但し今は 2004 年増補版による。
湯沢幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究』風間書房
吉町義雄（1976）『九州のコトハ』双文社
米谷隆史（2004）「『石見方言茶話』と『肥後方言茶談』をめぐって」近代語研究会 219 回発表資料

資料

藤原与一（1988）『瀬戸内海方言辞典』東京堂出版
『日本語方言辞典』（小学館 1989）
国立国語研究所（1989-2006）『方言文法全国地図』（全 6 巻）
平山輝男編（2008）『日本のことばシリーズ 32　島根県の方言』（明治書院）

（付記）米谷隆史氏には資料その他の点で有益な教示を受けている。また、本稿は科学研究費・一般研究 C（彦坂佳宣）の成果の一部である。

（本学特任教授）